

帯から出た恋文

辻 憲男（文学部教授）

「いつとなくお夏、清十郎に思ひ付き、それより明け暮れ心を尽くし、魂、身のうちを離れ、清十郎が懐（ふところ）に入りて」、我を我とも覚え、夜昼わかぬ夢見心地。商家の娘・お夏は類まれな美しさ、十六歳まで縁談をより好みし、とうとう手代の清十郎と駆け落ちした。ところが乗った舟が引き返し、連れ戻されて、清十郎ひとりが大金を盗んだカドで処刑された。これを知ったお夏は狂乱し、後に片田舎に引っ込んで残生を送ったという。

美男の清十郎は室の津で浮き名を流し、姫路の但馬屋へ奉公に来た。やさしく賢く人好きがする。心を入れかえ、まじめに働いて商売を任された。ある時、幅広の帯の芯からたくさんの恋文が出てきた。差出人がみな違う。お夏はそれを読み、女たちからこれほど思われるとは、あの清十郎、きっと外には見えぬ魅力があるのに違いない、と胸の火がついた。さてもはかなく無惨の浮世かな（西鶴『好色五人女』）。

西鶴の散文に対して、近松の『五十年忌歌念仏』は生き難い世のさだめ。意に染まぬ婚礼に、悪だくみがからむ。お夏の悲痛な叫びは、「清十郎殺さばお夏も殺せ、生きて思ひをさしょよりも」のはやり唄になった。人形芝居の観客は、ヒロインの胸のう치를思いやり、哀れさに涙した。元は今から350年ほど前の実話。姫路野里の慶雲寺には供養の比翼塚がある。



姫路城大手前、但馬屋があった西国街道の札の辻（さつにつじ）。